
かほくがた

河北潟湖沼研究所通信 Vol.9 No.1

「河北潟クリーン作戦」が実施されました



第9回「河北潟クリーン作戦」は6月8日の朝、まぶしい陽の差す河北潟湖岸で実施されました。今回は初めて宇ノ気町を含む河北潟全域でおこなわれ、約300人の参加者は10地点に分かれて湖岸のゴミを集めました。

河北潟湖沼研究所は内灘町の干拓地堤防沿いを担当しました。旧内灘大橋の下は相変わらずゴミが多く、釣りやバーベキューに来たと思われる人たちの残したゴミが目立ちました。とくにひどかったのは1つのグループによると思われるバーベキューセット一式がまとめて捨てられていたところです。その中には、肉を焼く金網、半分ほど使った木炭一箱と火ばさみ、割り箸一袋分(50膳入りくらいのもので使っていないものを含む)、瓶に入った使いかけの焼き肉のたれ・サラダオイ

ル・塩こしょう、肉などが入っていたと思われる食品トレー、ビール一箱分の空き缶と空き箱などが含まれていました。金網は新しく1回しか使っていないようでした。状況から近くのホームセンターなどでセットと食材一式を購入し、宴の後、そのまま全部捨てていったものと思われました。

今回から「河北潟クリーン作戦」は河北潟自然再生協議会が主催となりました。それにふさわしい取り組みとして、各団体が手分けして集めたゴミの実態調査を実施しました。その結果は、これからのゴミへの対策を考える材料となるでしょう。今後は捨ただけでなく、ゴミを増やさない・捨てさせない「クリーン作戦」が繰り返し広がられていくかも知れません。

水質の話 4 重要な栄養塩類の循環

前回、湖に窒素やリンが流れ込むと重大な問題が起こると述べましたが、本来これらの栄養塩類は重要な資源です。人間にとっても作物を育てるうえでも必須のもので、野生生物にとっても本来重要な栄養源です。自然界では、これらの栄養塩類が上手に循環する事によって多くの生命が維持されています。

健全な自然の水域では、有機物はバクテリアにより分解され、リン酸やアンモニア、硝酸などの無機物になります。そしてこれらの無機物は、植物プランクトンや水草に栄養として取り込まれます。植物が取り込んだ栄養は、植物プランクトンを食べる動物プランクトンへ、水草や水草に付いた付着藻類を食べる動物へ取り込まれます。そしてさらに捕食性の大型動物へ取り込まれます。

これとは別に、底に沈んだり水中に漂っている細かい有機物を直接食べる動物たち、シジミやイトミミズなどもいます。そしてこれらはさらに魚類や鳥類などの大きな動物に食べられます。これらを食べた鳥類は、陸上で糞をすることで、栄養塩類を再び陸上に戻します。

このように、栄養塩類の循環には生物が関わっており、食物連鎖を担う豊かな生物群集が存在してこそ、水域が良好な状態に保たれます。このことは、水の浄化を考える上で重要な前提です。生物の関わりを無視して工学的な手法に頼って水を浄化しようとする考えがありますが、本来の自然の循環を取り戻す方向と矛盾しないような注意が必要です。公園のコンクリート池のような人工の水辺の循環濾過システムと、自然の水域では、浄化の論理と方法は異なります。この点の注意が必要です。

ところで、陸から水、水から陸へという栄養塩の循環には、人も重要な役割を果たしていました。潟で魚やシジミを獲っていた暮らしは、尿尿の肥料としての有効利用と同時に営まれていました。潟の栄養分に富む泥をそ

のまま水田の肥料として用いていました。こうして、潟の水質は正常に保たれていました。

現在の暮らしの中には、潟からの漁獲はありません。海産の魚を食べていても、生産された尿尿は、良くても無機化されて水の中に直接戻されてしまいます。現代は一方向への物質の流れが加速され、海は徐々に富栄養化し、陸は徐々にやせ細っているような気がします。化学肥料は陸に栄養を供給する要素ですが、その原料の窒素については大気中にたくさん存在するものの、リンの埋蔵量はあと45～50年といわれています。近い将来枯渇の危機が訪れる可能性もあります。同時に化学肥料の過剰な使用は、水域の富栄養化を促進します。なによりも自然の循環を取り戻すことが重要です。(文章 高橋 久)

シンポジウム『河北潟及び干拓地の将来構想』第2分科会の報告

今年2月22日に内灘町町民ホールで開催されたシンポジウムの第2分科会では、「干拓地農業の繁栄」と題して、河北潟干拓地における、農業の活性化、構造改革特区の問題、地産地消、食の安全などについて、実際に干拓地で生産をおこなっている農家の方々も交えて、意見交換がおこなわれました。その内容を簡単に報告します。

1) 農業問題として考える事柄はおもに何か

最初に、自給率、安全性、信頼性、輸入、環境保全上の役割、WTO農業交渉、後継者問題、中山間地の問題、農薬の使用、循環型農業、世論の中で農業のあり方、米作の解禁など、各参加者からさまざまな問題がとりあげられ話がすすめられました。

日本に農業は必要なのかという率直な問いかけから議論が始まり、日本における農業の位置づけ、産業としての農業の展望について話が深まりました。国内では地産地消がおきていることや、農業なくして日本はなく、農業が活性化されることが日本の将来にとって不可欠といった意見がだされました。また日本の農業の将来を閉ざしている実状の問題点として、同じ先進国であるヨーロッパは安全管理の観点から高い自給率を維持しているのに対し、日本があまりにも食糧安全保障に楽観的であることや、日本にはノー政あって農政なしという言葉があるようにこころ変わる農政に根本的な原因がある、といった意見が出されました。一方、将来の農業振興を信じてほしい、安全性だけでなく、適地適作をすすめることが大事である、河北潟の干拓地はまだできて30年であり、駄目だというレッテルを貼ってはいけないといった積極的な意見もだされました。

2) 河北潟地域の農業について関心のある事柄

つぎに、農産物の発展継続、残留農薬のない農業、産直、ブランド化、加工、景観の美しさ、家庭菜園として高齢化対策、大豆の栽

培、地域支援対策、循環型農業、ゆうきの里の堆肥の活用、小さな畑からも直販できるかたち、干拓地の地理的条件を活かした農業など、さまざまな意見が出されました。

そのなかで、まず大豆の栽培をめぐって意見が交わされました。大豆はタンパク質、リジンなど有効成分が大量に含まれていることから健康食材として考えられ、味噌や醤油を作りだせていけたらいいという声が、大豆自給率の向上を願う農家の方からあがりました。しかし収益が低すぎるため、生産していない状況にあります。つぎに家庭菜園を推進する意見が出されました。新興住宅地や町では1年間ごとに抽選で選ばれる菜園がありますが、応募者が多いため実際なかなか当たらない状況となっています。干拓地が家庭菜園として利用できればと、高齢になって畑を作りたいという方々の立場も考慮された具体的な意見で、十分に検討されていく必要があります。

3) 干拓地は今後、どうあればよいと思うか

このテーマでは、安心ある食の生産、循環型農業、自然に配慮したエコ農業、町おこし、近隣の市町村に野菜の取引、消費者との定型、鼠や鴨を捕った方がいい、ひまわり村のように菜の花でも人気を呼べるかなどの意見が出されました。

入植者の方から、干拓地は水田にするために造成されたもので、本来干拓地農家は転作奨励金を得られるはずであり、そうすると全国的な競争力についてはくるといったことや、現在一筆単位60aであるがその区画規模を下げたほうがよいといった、制度の改正を求める強い意見がありました。また現状では却下されている経済特区について、農水省の規制緩和としての経済特区の性格と干拓地農業の立場からの考え方のすりあわせをおこなう必要があるという意見も出されました。

(生物委員会 川原奈苗)

お知らせ



イベント情報

「夏休みに河北潟で自然体験をしよう」

夏休みの一日を使ってさまざまな自然体験のイベントが行われます。河北潟自然再生協議会が主催し、同協議会に参加する団体がさまざまなプログラムを展開します。また金沢市緑と花の課が共催として「こなん水辺公園親子で生きもの探検」をおこないます。

開催日時 2003年8月24日(日)9:00から
会場 「こなん水辺公園」(金沢市蚊爪町)
対象 参加はお一人でも親子でも自由です。
プログラム

- 1)河北潟「グループ対抗deいきものさがし！」
- 2)「バード・サクチュアリ基金、募金開始バードソン」
- 3)生きものマップ作り大会
- 4)こなん水辺公園「親子で生きもの探検」

河北潟湖沼研究所もこの企画に参加します。当研究所のプログラムは以下の通りです。みなさまの参加をお待ちしています。

<河北潟湖沼研究所の企画>

河北潟「グループ対抗deいきものさがし！」

グループごとに設定したルートを歩きます。目的は、ルートごとに決めた生きものをすべて見つけること。そのほかりストに掲載されている種類が見つかったとその点数が加算されます。得点の多いグループが勝ちです。各グループには生物の専門家がアドバイザーとして参加します。グループは下の4グループになります。参加したいところを自由に選ぶことができます(定員なし)。基本的にはゆっくり歩いて自然観察をします。誰でも自由に参加できます。

太野川コース「ミズアオイ、カイエビ、クロベンケイガニ、ゴイサギ、ミサゴ」

潟周辺コース「アサギ、ハンノキ、ドブガイ、クサガメ、カイツブリ」

干拓地コース「オギ、ミズカマキリ、トノサマガエル、アオサギ、チュウヒ」

河北潟東コース「オモダカ、マシジミ、メダカ、ニホンアカガエル、アマサギ」

時間 9:00-12:00

連絡先 事前のお問い合わせは河北潟湖沼研究所(Tel.076-261-6951;担当 川原)まで。



< 編集後記 >

「かほくがた」9-1の発行が少し遅れ、ご迷惑をおかけしました。最近では、河北潟自然再生協議会やその他の団体も、一生懸命河北潟の環境保全活動に取り組んでいます。友の会事務局のメンバーもさまざまな活動に関わっています。取り組みが盛んになることは大いに結構なことですが、事務作業を行っているメンバーの負担がどんどん増えています。事務活動を行うメンバーを増やすことは、とても切実な問題になっています。どなたか「かほくがた」発行を手伝っていただけませんか。大歓迎します。(高橋)

「かほくがた」 VOL.9 NO.1

2003年8月7日発行

発行所 河北潟湖沼研究所友の会

〒920-0051 金沢市二口町八58

河北潟湖沼研究所金沢事務局内

TEL:076-261-6951 FAX:076-265-3435